
こてつ物語の日常

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こてつ物語の日常

【Nコード】

N4998W

【作者名】

yuki

【あらすじ】

こてつ物語の登場人物たちを使った、ショートストーリー。

登場人物一人につき、一話ずつです。

事件や、大きな出来事がない時の、彼らの日常なんかをコミカルに書いてみました。

お暇つぶしにどうぞ。

（このお話はR15にします。全くのコメディですが、品のないネタもあるので）

いつの日常（前書き）

登場人物のショートストーリーですが、いきなり人じゃ無かったです
ね……

いつの日常

ボクの名前はこてつ。毎日とても平和に暮らしている。

ボクはどうやら柴犬という犬らしい。

「らしい」って言うのは、ボクは犬って種類のいききもので、お母さんとは違うらしいんだけど、お母さんはボクを別のいききものだなんて思っていないようだし、ボクもそんなこと分らない。

でも、他の人たちがお母さんに、

「この子はタヌキみたい」とか、

「あらいぐまラス〇ルにそっくり」とか、

「コーギーとのミックス犬？」とか聞かれるたびに、

「いいえ。この子は立派な柴犬ですけど？」と、答えているから、きつと柴犬なんだと思う。

そして、お母さんの言葉から柴犬って言うのは立派ないききものみたいなので、ボクはそれを自慢に思っている。

お母さんはボクにとっても優しくしてくれる。美味しいご飯やおやつもくれるし、なでなでだってしてくれる。

ふかふかのお布団は、背中にいつもフィットするいい柔らかさにしてきているし、お腹にタオルもかけてくれる。

大きな音がしたり、雷が鳴って怖い時も、ボクを守ってくれるし、落ち着かせようとしてくれる。

「お散歩」って言うお出かけは一番好きだ。この言葉を聞いただけでワクワクする。

他のお出かけだと時々「お留守番」って言う、ボクを一人ぼっちにする嫌な時間があつたりするけれど、「お散歩」の時には、ボクの大好きな場所や、知らない楽しい所（たまにそうじゃない所もあるけど）に、お母さんはいっぱい連れて行ってくれるから。

ただ、あんまり張り切り過ぎて、ボクの足が棒のようになっても

気がつかない事がある。

（ホントは気がついていているような気もする）困ったさんだけど、大好きなお母さんのする事だからゆるそう。

でも、こんなに大好きな「お散歩」を、もう一人、ウチで僕をかわいがってくれている「タエさん」って人は、ちよつと良く思ってくれない時がある。

「こんなに暑いんですから、今日くらいはお休みしていいんじゃないですか？」タエさんは口をとがらせる。

「あら、それなら私が抱っこしてあげるもの。こてつは暑いアスファルトが苦手なものね」と、お母さんは言う。

それじゃ、散歩になりません。とか、昨夜、発砲騒ぎがあったから外に出てほしくないのに。とか、タエさんはぶつぶつと言っているけど、お母さんはそんな事には取り合わない。

そして外に出るとタエさんは、物凄い勢いで目をあちこちに光らせ、ボクに負けないくらいに聞き耳を立てている。

僕はお母さんが大好きなので、誰一人知らない奴をお母さんに簡単には近づけたくない。だからタエさんの気持ちは分かる。でも、お母さんはそんな僕たちの緊張なんて、全然気がつかない。

それにお母さんはとっても人気者みたいだ。いろんな人がしょつちゅうお母さんに近づきたがるんだから。

そういう人はちよつとおかしな人たちで、とっても騒々しく誰かと暴れては「ぐえっ」って声あげたり、「ひっ」って悲鳴あげて逃げたりするし。もしかして変態さんなのかもしれない。人気があるのも考えものだ。

そんな風に僕たちが一日を過ごすと、夜遅い時間に「父さん」とお母さんが呼んでいる人がウチに帰ってくる。

この「父さん」って人はよく疲れた顔をしているけど、お母さん

の話を聞くと余計疲れた顔をして、

「すまん、ご苦労だった。これから気を付けてくれ」と、何故かこつそり、タエさんにため息交じりに言うんだ。

まるで毎日疲れに帰って来ているみたいなんだよな。そのくせ、ボクのお母さんを時々独り占めしようとするし。

でも、そんなのボクは許さない。ボクが抗議の吠え声をあげると、悲しそうな顔で、

「こてつは由美にばかり懐く」って嘆いている。そんなの知るもんか。

お母さんを独占しようとするなら、ボクだって容赦しないもんね。て、いうか、なんでこの人、毎日ウチに帰ってくるんだろう？

ボク達はお母さんとタエさんと僕で、楽しく暮らしているし、そんなに疲れるなら帰ってこなきゃいいのに。不思議だなあ？

そういえば、ボク、この人の名前、知らないぞ。お母さんの名前は「由美」、もう一人の人は「タエさん」。だけどこの人、「会長」とか、「父さん」とか呼ばれてるけど、名前、何？

もしかして作者が横着して、まだ名前決めてない……ワン、ワン、ワン、ワン。

（あれ？ 急にしゃべれなくなっちゃったみたいだ？ なんで？）

由美の日常

「さて、お洗濯おしまい。今日も良く、乾きそうね」

洗濯物を干し終えた私は、青空を見上げながらホッと息をついた。「そうですね。でも最近は突然滝のような雨が降ったりしますからね」

タエさんが一緒に空を見ながら言う。

「でも、洗濯物はすぐに乾くと思うわ。こてつの布団はお天気の場合を見て、タエさんが干してくれるかしら？」

「ええ、もう少し日が高くなったら雲行きを見て干しましょう。洗濯物もなるべく早くに取り込みますね」

「お願いね。今日はこんなに洗濯するつもりじゃなかったんだけど、今朝の散歩で、何故か私の横で川に落ちた人が何人もいたの。皆さん御無事そうでよかったんだけど、私もこてつもびしょ濡れになってしまった」

「……災難でございましたね」タエさんは何故か頭を抱えるようにして言った。

「ねえ。私の周りって、他の人より少し、賑やかなのかしら？」私はふと、思いついて言った。

「は？ な、何故そう思うんですか？」

「私の犬を飼っている他の友達は、散歩中に頻繁に叫び声を聞いたり、転ぶ人を見たり、川や池に落ちる人を見かけたりはしないって言うのよね」

タエさんはなんだか難しい顔をして、懸命に考えていた。あら？ そんなに難しい質問、しちゃったかしら？

「どこにでもそっかしい人というのはいるものですよ。奥様は特にそういう人とのめぐりあわせが多いんじゃないでしょうか？」

「めぐりあわせね。そんなものかも知れないわね。そういう人たち

のおかげで、気をつけて歩くから、私もこてつも事故にも合わず、怪我をしないで暮らせるのかもしれないわね」

「私もそうだと思いますよ」タエさんは笑って同意してくれた。ちよつと疲れた顔にも見えるけど。

「じゃあ、私、いつもの引きこもりをするわね。こてつが私の裁縫部屋に入ってこないように見張っていてね」

「承知いたしました」タエさんはいつものように丁寧に頭を下げた。私は最近、ミシンがけに凝っている。針やはさみなどの危険なものがあるから、こてつの出入りは厳禁。でも、作っているのは全部、こてつのための物。

既製品にも色々な物があつて楽しいのだけれど、こてつは柴犬にしては少し大柄な子だし、生地の手柄もありがちなものになりがち。

でも、手作りならこてつにちょうどいいサイズに仕上げる事が出来る上に、市販品には無い柄の生地で、可愛い服を作る事が出来る。小物類も同じ生地で作れば、おそろいで楽しむ事が出来るし、だから私はこてつのために、抜き取る羽こそないけれど、まるで羽を紡いで機を織る「鶴の精、おつう」のように愛情込めてミシンをかけ、裁縫部屋にこもるのがここ数日の日課になっている。

サイズの確認と、こてつに似合っているのか確かめたくて、時折部屋から出ては、こてつに制作途中の着物をあてがってみる。

「はい、こてつ。じつとしてね」

するとこてつはかつちりと固まって、真顔で訴えるような目をして息を殺し、ぬいぐるみのようにピクリとも動かなくなる。

そんなに協力的だなんて、こてつも完成を心待ちにしているのね

！ おかーさん、頑張っちゃうわ！

そういえば今年は本当に、突然の豪雨が多いわ。この際、思い切つてこてつのレインコートも新調しようかな。ミシンがけが一段落したら、デパートに買いに行こうかしら。

こてつの新しいコート姿。どんなにかわいらしいかしら？ 私はこてつをじっと見つめて、その姿を想像し、私の視線を受けたこてつは、一層、真顔になって少し後ずさりする。

こてつには沢山、たあゝつくさんの、服や、被り物を着せてあげたいわ。フリル、レース、リボンにお花。大好きな可愛い物をいっぱいつけてあげて、お母さん、ますます張り切るからね。

あら、こてつったらそんなに心配そうな顔することないのよ。あなたのためなら、お母さんは苦になりませんからね。

私は満面の笑みをこてつに向けてあげる。こてつは喜びのあまり、涙まで浮かべているようだった。

タエの日常

私がいつものように奥様のところに伺うと、奥様はラフな服装ながら（でも、花柄とフリル付きで）お散歩にしては少し丁寧な外出の支度をしていらした。

「おはようございます。どちらかにお出かけですか？」

奥様は昨夜、デパート爆破事件に巻き込まれると言う、大変な事態に会われたばかり。本当は奥様ご自身が知らないだけで、常にいるんな輩に狙われておられる身の上のだけれど、いつもご本人が気づかずにいる以上、昨夜のことは大変な非常事態だったはず。その翌朝に外出なさるとは、私は思いもしなかったのでビックリしながら声をかけてしまう。

「おはよう、タエさん。昨夜の事で私とこてつの事をみんな心配してくれたみたいだから、元気な姿を見せてこようかと思って」

私は奥様の言うところの「みんな」に反応してしまう。この人が「みんな」と呼ぶ時って、絶対、ご近所の人たちの話じゃない。

「ネットのお友達と、お会いになるんですね？」分かってはいるけど確認するように聞いてしまう。

「ええ。今日はツイッターのお友達数人とね。主人に電話は入れたから」

そうおっしゃるのだから、電話はなさったんでしょね。ただ、会長の承諾までは、多分得ていないだけなんだろうね。私は会長に同情して、そつと溜息をついてしまう。

「お帰りはいつになりますか？」

「ごめんなさい。ちよつと、遅くなりそうなの」

この言葉で普通の主婦に思い浮かぶのは、夕方遅くなりそうだから、夕食には間に合わないかもしれないだとか、そのあたりなんだろうけれど、この方の場合は油断できない。

車のキーを握らせたら最後、「ちよつと散歩に」と言えば、犬連れでも小旅行でもおかしくない観光地まで出かけて来るし、「少し遠出を」と言えば、本州のどこに行ったっておかしくないのだから「少し遠出」のお出かけで帰宅が二、三日後、なんて事態はなるべく避けてほしいのだけだ。

「高速に乗れば一時間くらいで着けるんだけど、会う場所がドッグランだから長居しちゃうと思うの」

ああ、それなら本当に「ちよつと」だ。この方の感覚で言えば完全に「近所感覚」だわ。会長にはいろんな事情があるから、奥様を心配して不安になるのだろうけれど、この方とお付き合いし続けてすっかり馴らされてしまうと、このくらいは何でもない事になってしまう。

それはそれで活動的（？）でいいとは思うのよ。ただ、この方がしょっちゅう会長の敵方に狙われたり、昨夜、異常な事態に巻き込まれたばかりでないのならね。

奥様のこの、普通ではない程の恐怖心のなさは、明らかに運が強すぎるせいだわ。

奥様相手なら、突発事態の方が逃げていくみたい。この間は青信号に車が突っ込んだけど、その時奥様が「たまには青信号の間、どんな人が渡るのか観察してみたいわ」と言つて、急に横断歩道を引き返したりしていたし。

おかげで奥様を誘拐しようとした輩の方が、車に突っ込まれて全治六カ月の重傷を負ったとか。

奥様を狙った男の後ろに突然つむじ風が発生して、「あの中に入ってみたい！」と無茶な事を言う奥様にたまたま突き飛ばされ、男の方が風に巻き込まれて大怪我を負ったり。

一見無防備に見える奥様だけど、その運の良さと異常すぎる行動は、常人には計りようのない物があるわ。この人の行動を先読みし

てどうにかするなんて絶対不可能。

だから、そんな奥様を狙う勇氣のある人は、実は何も考えずに奥様をただ、力任せに襲おうとする単純な人。そんな人は会長の手の者に簡単にひねられるか、運が悪ければ、奥様独特の強運パワーに死ぬような目にあわされるかのどちらかだもの。

これで恐怖心なんて育つわけがないし、奥様の周りは叫び声や、悲鳴や、人が倒れたり、落ちたりする光景にあふれているのも仕方がないわ。

こんな人に近寄る方がどうかしている。まあ、知らずに近寄っているのでしょうか。

でも、会長から見れば、こんな奥様が普通の、危なっかしい可愛い人に見えているようなのよね。

そんな会長の方が、私には一番危ない人に思えるのよねえ。

ああ、怖い、怖い。こんな奥様を狙ったり、護衛をさせられる人たちって、ホント、気の毒ねえ。

あら？ よく考えたら私もその一人だったんだわ。ああ、これからも余計な事に巻き込まれたりしませんように。

会長の日常

私はこの街の裏社会を牛耳っている、こてつ会という組織の会長だ。

この街には昔から「こてつ組」「華風組」「真柴組」という三つの組があり、時折、新興势力的な組織が発生したりもするが、主にこの三つの組織を中心に、裏の世界を担って来た。

その三つの組が最近連合した組織となり、最も勢力を誇っていた「こてつ組」の組長をしていた私が会長に就任したのだ。

先日、こてつ組の新しい組長も決まり、ようやく会長職に専念できる環境を整える事が出来た。

かなりまだ危なっかしい組長だが、物事を始めた時などそんなものだろう。私だってやむを得ず親の後を継いで組長になった時は、右も左も分からずに、すり寄る奴等を見極めながら孤軍奮闘。それなりに苦労をしたものだ。

私は好きでこの世界に入った訳ではない。親の死によって、抗争の激化を避けるために、仕方なく組を継いだだけだ。だからただの社会人として由美を娶ったのだ。

だが、親がこの街を愛して守り続けてきたことは理解しているし、私も街と組のために全力を注いできた。こてつ組連合の会長として一番最初の話から登場しているし、今でもこの話に私の存在は必要はず。そこまではきちんと（？）設定は出来ているようだ。

それなのに、名前はまだ無い。まるで「吾輩は〇である」の冒頭部分のようだ。

私なしでは「ドレミ三婆」は成り立たない。話の上の重鎮であるはずなのに、作者のネーミングセンスが無いせいで、迷い猫並みの扱いだ。

登場人物がやたらに多いのも問題だと思うが、それでも悪役にだ

って「田中」や「関口」、一回っきりの使い捨て役にも「西岡」の名がついた。「田中」には「田沢」の偽名までついていた。私はそれ以下か。

これだけ愚痴ればさすがに作者に同情されて、名前がついたようだ。どんな名だ？

「小手津 継男」

……馬鹿にされているとは思えない。

しかも、作中では「会長」で用が済むので、名前が出ることはまず無い？ だからつていい加減すぎるだろう！

作者にとつて、私への関心はかなり薄い方らしい。結構いいようにこき使われている気がするんだが。

作者には後で弾丸入りの封筒を送りつけておこう。そうしよう。

存在感がピンチにあるのは作者にだけではない。最近、由美やこつにも軽く扱われている気がする。

由美の出かけ好きは相変わらずだが、今や私への遠慮もなくなってきたような。

組に着いてすぐ、由美から電話が来たので出してみると、

「あ、あなた？ これから私、ちよっとツイッターの犬友達に会いに行くの。遅くなるんで、夕飯はタエさんが用意したものを一人で食べてね」

「おい。昨夜爆破されたデパートに閉じ込められてひどい目に会ったばかりじゃないか。少しは家でおとなしくしていられないのか？」

「あら、それで私やこつのお友達にとつても心配をかけたから、元気なこつつの姿を見せに行くのよ。大丈夫。会うのはドッグランだから閉じ込められたりしないし、高速に乗ればすぐ帰れるから」

「高速？ 近くじゃないのか？ 一体どこまで……」

ワンワン、ワンワン。電話口の向こうにこつつの催促鳴きが聞こえる。由美の気がそれるのが手に取るように分かった。

「〇〇市よ。じゃあね、行ってきます」通話が一方的に切れてしま
う。

友達の心配を気にかけるより先に、私の心配を気にかかけようとは
考えないのか！

いや、怒っている場合じゃない。誰かに後を追わせないと。礼似
は……ああ、もうこういう時には使えないか。こうなったら香にで
も頼むか。

電話をかけようと持ち変えた先から、また着信音が鳴る。由美の
奴、考え直したか？

携帯の表示は通話ではなく、メールだった。由美独特の派手な絵
文字のデコレーションで、

『私の裁縫部屋の物に触っちゃだめよ。こてつのお正月の晴れ着を
作ってるんですからね！』

と、打ってあった。

正月？ 今は、まだ、夏なんだぞ！ どれだけこてつ中心に世界
が回っているんだ、あいつは！

私の裏社会での地位は上っているが、家庭内の地位は落ちていく
一方のようだ……。

香の日常

「ハルオー。悪いけど車貸してくれる？」

私はどもり癖のある、（ちよつとさえない）彼氏のハルオに頼んだ。

「い、いいけど。ど、どうしたんだ？ きゅ、急に」

「会長の言いつけでね、奥様がこてつを連れて犬友達に会いに、○市に行くから後を付けてほしいって。日帰りだけど高速乗るって言っし、あの奥様の事だから何があるか分かんないでしょ？ バイクより車の方がいいかと思って」

「お、奥様、で、出かけるのか？ ゆ、昨夜あんな目に、あ、会ったばかりなのに」

「みたいよ。本当にじつとしてられない人なのね。前世はハツカネズミだったんじゃない？」

奥様の前世を占っている間にハルオは車庫から、小さくて古そうな軽自動車を出してきた。

「えー？ コレ？ 組の車じゃダメなの？」私は不満を漏らしたが、「だ、駄目。こ、公私混同はしない。こ、これが俺の車。お、俺じや、こ、このくらいの車しか、い、維持できないよ」

「ふーん。一応仕事なんだけどな。まあ、タダで借りるのに文句も言えないか」

「そ、その代わり、お、俺が運転するよ。き、昨日の今日なんでも、店も、や、休ませてもらえるんだ」

「え？ ホント？ ラッキー。一人じゃつまんなかったんだ」これならハルオとデート代わりだ。

ところが、私はすぐにイライラしてきた。ハルオの運転のクソ真面目さに。

「ちよつと、ハルオ。これじゃ奥様に追いつけないよ。今止まった

信号だって黄色になったばかりじゃない。制限速度だってピッタリ過ぎる。交通の流れに乗らないと、かえって迷惑だよ。高速乗る前に私に代わって」

端に車を止めさせると、ちょっと強引に運転をかわる。そういえばバイクばかりで車の運転って、久しぶりだな。

おお、ボロ車のくせに一応ターボついてる。どうせ高速だし、飛ばしちゃお。

いい気分で加速していたらハルオに声をかけられた。

「か、香。な、何やってんだ。お、奥様の車、お、追い越してどうする」

「あれ？ そうだった？ いつ、抜いちゃったんだろ？」

そういえば何だか内装がゴテゴテした車を追い越した気がしないでもないような。

「ちや、ちゃんと前見て、う、運転してるんだろうな」

「しっつれいね。教習所のセンスと同じ事言わないでよ」

ハルオの顔色が変わる。そっぴやあの人もよく、こんな顔色してたっけ。

「い、言われてたのか」

「だって、車ってバイクの運転ほど、面白くないんだもん。車体と一体感みたいなの、あんまりないしさ。緊張感なくて、つい、ぼーっとしちゃうんだよね」

ハルオを見てそんな話をしていたら、あくびが出て来た。

「わ、分かった！ 分かったから、き、緊張して、ま、前見て運転して！」

「うるさいなー。だったらハルオが運転してよ。ほら、代わって」
そう言っ私はハンドル片手にシートベルトをはずし、腰を浮かせてハルオのいる助手席に足を延ばそうとする。

「な！ 何やってんだ！」ハルオがぎょつとした顔をするけど、私はかまわない。

「そつちに移るんだってば。ほら、ハルオもベルト外してこつち来てよ」

「出来るか！ 走行中の高速だぞ！」ハルオのどもりが止まる。

「出来るよ。礼似さんなら高速でバイクから車にだって乗り移れるよ」

ハルオは一瞬絶句すると、

「あの人と、一緒にしないでくれー！」と、叫んだ。

それでもハルオは、なんだか凄い顔をしながら運転席に移動した。私がアクセルとハンドル、ほとんど離しかけたからかもしれない。なんだ、やればできるじゃない。嘘つきー。

そしてハルオは、

「か、香は、に、二度と、く、車の運転、し、しちゃダメだ！ く、車も貸さない！」

と、肩で息をしながら断言した。

ちえーっ。つまんないのー。

前にバイクの後ろに乗せた時も固まっていたしな。度胸のない男だなー。

アトラクションのスリルなんて、目じゃないのに。あゝあ。

当たり前ですが、このお話はフィクションです。上記のようなことは絶対にあり得ませんので、死にたくなければ真似しないでください……っ！ 死にたくても真似すんなっ！ 殺人行為です！

ハルオの日常（前書き）

好きなイケメンを思い浮かべてどうぞ（笑）

ハルオの日常

この間は香と車に乗ってエライ目に会った。あの娘には絶対に車の運転、させられないな。

大体、香も俺が相手だと調子に乗って無茶苦茶やっているんじゃないか？　なんか、そんな気がして来たぞ。

良平の前で好き勝手した事もないし、一樹さんの前では見事に猫かぶっていたし。絶対俺とは態度が違う！　智の前では地が出ていたが、あれは向こうが突っかったせいだろうし。

それだけ気を許しているってことかもしれないが、反面、相当俺軽く見られているよな？　一応それでも、「その筋の男」なんだから、もうちょつと迫力を感じて……

よせばいいのに、つい、鏡を見てしまった。これじゃ、どうしようもないか。

身体は細いし、小さいし、構えていないとすぐ、猫背になるし、そもそも、どもり癖がどうにもならないし。

顔だつて地味だよな。垂れ眉だし、平凡な目鼻立ちだし、おちよぼ口だし。特に目なんか小さくてクリクリして気の弱さがそのまんま表れちまつてる。迫力なさすぎだ。

良平は格別目が大きくは無いが、キリつとしている。前に御子が連れて来た女の子が「イケメン、イケメン」って褒めそやしていたもんなあ。確かに顔立ちは整っている。組長も年は取っているが、顔はまずくない。

一樹さんはもう少し明るい雰囲気か。でも、目は迫力あるんだよねー。あの人も顔はいいよなあ。

智はたいしたことないよな。顔に性格のひねくれ具合が出ちまつてるし。まあ、気の弱そうな俺よりはマシだけど。背も、俺よりはあるけど。体格も……もう、よそう。

なんだよ。俺の周り、（智を除いて）顔のいい男ばかりじゃないか。なんの嫌みだ？　これは。

親を恨んでもしょうがないし。ああ、親は華風組長の土間さんだっけ。

土間さんの目は化粧しているとはいえ、はつきりして大きいよな。あれなら少しは迫力が保てるんだが。輪郭なんかは俺も少し似ている気がするのに、残念ながらそこは似なかったみたいだ。

待てよ？　土間さんだって、あの格好だから納得していたが、男の体格で考えたら、かなり細身で小柄なほうだ。

土間さんも俺の母親と一緒にあったくらいだから、若い時は「普通」に男だったはずだ。じゃなきゃ（母親の趣味に問題さえなければ）俺、生まれてないだろうし。

俺と似た輪郭。小柄で細い体格。それで、普通に男。

きつと苦労したんだろうな。いや、したに決まっている。俺みたいに女の子たちにかかわれたり、バカにされたりしたんだろうか？　今、見た目が女になってしまったのも、その辺の事もあったんじゃないだろうか？

ああ。何だかようやく、親子の実感が湧いてきた。そうだよな。血が繋がっているんだもん。土間さんが味わった苦労、俺にも分かります。たとえ姿は女性でも、あなたは俺の、父さんなんですわ！

何だか意味もなく感極まって、華風組に来てしまった。土間さん、いるだろうか？

事務所にいたアツシさん（この人までイケメンかよ！）に聞くと、土間さんは留守だった。ところがアツシさんが「ちょっと話させんか？」と言って、近くの喫茶店に連れてこられた。

「いや、すいません。引っ張って来て。組で話すわけにはいかないもので。俺、赤ん坊の時のあなたを知ってるんですよ。こんなに大きく育って。感無量です」アツシさんは感慨深そうに俺を見ている。

「は、はあ」

大きく育たなかったから、コンプレックスなんです。とは、言えないな、こりゃ。

「目は小さいが、形はお母さん似ですね。口元もよく似ている。富士さんも可愛らしいお嬢さんだったが」

アツシさんは嬉しそうに言っているが、俺はへこんだ。母親も目は小さくなかったのか。うーん。

「体つきは若い時の組長にそっくりだ。本当にあのお二人を思い出させてくれる」

やっぱり、土間さんもこんな体格だったんだ！俺は何だか嬉しくなる。

「ど、土間さん。お、俺の母親に好かれるのに、た、大変だったでしょうね」俺はしみじみと言った。それなのに。

「そんな事はありませんよ。富士子さんも一目惚れだったんじゃないですか？ 当時の組長に無理を言っ、今の組長をウチに置くように説得したんですから」

「……へ？」

「あの頃の組長はモテましたからね。本人も調達係だなんて言っ、俺も世話になった事がありますよ」

え？ ええええ、ええー？

「女顔の美少年でしたから。女性のアしらいも上手くて、一時、潰れかけたバーの立て直しにも一役買ってくれました。だから女性の姿になったばかりの頃は、なかなかの女っぷりで……あ、いや、コホン」

それってただの、ナンパ野郎なんじゃ……？

なんで、なんで、親子でこんなに差があるんだよおー！ 恨むぞ

！ 神様！ バッカヤロー！

アツシの日常

「アツシさん、ハルオとなに話してたんスカ？」

事務所に戻った途端に、俺は智に質問された。ハルオがらみにコイツはすぐ、反応する。

「個人的な事だよ。お前に話すほどの事じゃない」

そう言っ言葉葉を濁したが、智は全力で不満そうな顔をしていた。ちよつとは取り繕えよ。

智が事務所の前に張り付いていた時は、組長の若い時を思い出して、いかにも気になって仕方なさそうな組長をせつついてしまったが、コイツの世話を焼くお鉢が俺に回ってくるとは思わなかった。

大体、ここに来るような今時の若い奴（こういう事を言うと、年寄り臭いんだが）は、少しばかりの腕力と、へ理屈と言うか、知ったかぶりと言うか、浅知恵で世の中渡っていけると舐めてかかる奴が多い。そして智はことさら人の言う事に耳を傾けようとしない。

組長の若い時も結構生意気だったが、背伸びをしている可愛げなんかもあったものだ。

コイツも、ハルオを意識して対抗心を燃やしている辺りは可愛げがあるのだが、どうも、目上に対する緊張感の様なものが足りない気がする。これも時代の流れだろうか？

「……と、言う訳で、N社の開発部の課長が、開発部長のパワハラを受けているらしい。ここに俺が人権問題専門のカウンセラーを装って、この課長に近づく。N社の新しい商品の情報をコイツから聞き出して、D社に提供するんだ。その情報でD社の株価も吊り上げて、こつちも十分な儲けを取る。この課長には辞表をたたきつけてもらって、D社に鞍替えさせる。本人にはヘッドハンティングだと思わせておくんだが、そこで余計なトラブルを起こしたくない。コイツ、部長からのパワハラを憂さ晴らしに、ウチのシマのバーのマ

マと浮気しているんだ。D社での待遇に文句でも言つて来たら、この浮気をネタに俺が脅しをかける。コイツ、妻に頭が上がない奴だし、ママの方でも実は手を切りたがっているから、ママも協力してくれる。智、お前、写真でも撮つて上手い事、証拠固めの品を用意するんだ」

「つまない仕事ツスね。インサイダーの片棒に産業スパイの真似ごと。脅しのネタは浮気ツスか？　しかも俺、脅し役さえ回ってこないじゃないツスか」智は口をとがらせている。

「斬った張つただけの世界じゃないんだ。こういう仕事が、一番大口で確実な収入になるんだ。文句を言うな」

「アツシさんも、カウンセラーって柄じゃないツスよね？　バレるんじゃないツスか？」

「必要とあれば何にだって化ける。お前とは年期が違つんだ」さりげなく胸を張る。

「へー。役者ツスね。お手並み、拝見させていただきます」

そういう言い方が生意気なんだ！　と、大人げなく騒ぐのも余計軽く見られそうなので、ここは耐えておく。コイツには言葉よりも、実力を見せて睨みを聞かせる方が効くだろう。

さつそく俺はN社に乗り込み、開発部の課長に会った。勿論、裏のコネを使つての紹介で潜り込んだのだ。このくらいなら朝飯前だ。慣れた手つきで智に用意させた名刺を渡す。

「……なかなか、ユニークな名刺をお持ちですね」課長はそうニヤニヤする。ユニーク？

『ニューハーフショーの店　クラブ・ドマンナ　ホステス　あけみ　またのご指名をお待ちしています』

智の奴！　やりやがった！

「智！なんてことしてくれた！」俺は組に戻るなり、逃げ回る智を追いかけて回した。

「アツシさんの事だから、上手い事ごまかしたんツスよね？さすがだなあ」

「バカめかせ！ おかげで俺はあの店の常連だと思われたぞ！ こんな立場で脅しなんかかけられないだろうが！」ちよろちよろ逃げ回る智を追いかけて、俺はカッパしながら叫ぶ。畜生！ 捕まらない！

「だから今回は俺が脅し役になってかまわないツスよね？」

「冗談じゃない！ お前は、組長に言っただけで破門してもらおう！」

「あー、それ、無理ツス。組長が俺の協力者ツスから。そろそろ俺にもそういう仕事、させてもいいって言ってくれたツス。あの名刺も組長からもらいました」

組長もグルか！ そーいや、あの人とは長い事そりが合わなかった。刀を持たない組長に八つ当たりしていたから。こりゃ、俺に対する仕返しに違いない！

「組長が言っていました。刀の腕を伝えるだけが指導じゃない。アツシさんのやり方で、若手の世話を焼けるようになってくれるって」

「やっぱ根に持つてるんだ！ 前言撤回。可愛げの欠片もなかった。組長は根っから、底意地が悪い人だ！」

「華風組は代々、世話焼き上手な人間に恵まれて、助かるそうツス」俺は世話焼き上手じゃない。ハルとは違う。断じて違う！

組長ー！ 勘弁して下さいー！

智の日常（前書き）

この辺からの品のなさが、R15にする原因なんですよー。笑って許してね。

智の日常

「いやあ、アツシさん、カンカンでした。大丈夫なんスか？ あんな事して」

俺はちよつとした事でアツシさんにひと泡吹かせたので、胸の奥をスツとさせながら組長に聞いた。

「まあ、大丈夫でしょう。アツシさんも意外と過保護なところがあるから、ほつとくとあんたに突っ込んだ仕事させないし、私も彼にはちよつと仕返ししたい気分もあつたしね」

俺に協力した組長も、悪びれることなくそう言つてのける。俺もそれに乗つかつたんだが。

「意外と組長も、人が悪いんスね。俺も気をつけないと、油断できないな」半分本音でそう言つと、

「あら、あんたはその前に私の間合いに入れる様にならないと。油断どころか、私になぶりものにされるわよ」

「……怖い事、さらつと言わないでくださいよ。これでも必死で向かつてるんスから」

俺は正式に組に入れてもらつてからというものの、早速組長からシゴキを受けるようになった。

組長が言うには、俺は組長が思っていたよりは身を守るすべと、タイミングの計り方を分かつてはいるそーだ。それなりに長くナイフを使っていたので、身体が危機に反応しやすくなっているそーだ。ただし、それがあだとなつて悪い癖もついてしまっていて、特に相手に仕掛けようとする時に隙がでやすい上、ナイフを素早く振り回せる分、大振りになつたり、身体の動きが雑になつたりしているんだそーだ。

それを直すのが先だと言う事で、俺はナイフや刃物はおろか、木刀さえ最初は持たせてはもらえなかった。どの道ここでは相応に腕

が上がりなければ、刃物を持たせない事になっているらしいが。

それが昨日、ようやく一通りの型は憶えただろうと言う事で、木刀を握らせてもらえた。

すると組長が、さっそく俺の相手になると言う。俺は最低限の身を守る必要があるから、多少スパルタでも大丈夫とのことだったんだが……。

いや、まいった。組長が強いのは分かっていたが、こんなに手ひどく打ちこまれ続けるとは。

遠慮もクソもあつたもんじゃねーや。こっちは頭や胴体を守るだけで精いっぱい。手も足も打撲だらけになってしまった。

思わず身体が引いて守りに入ってしまうと、今度は言葉の「口撃」が始まる。

トロい、鈍い、守りが甘い、型が崩れると戻せない、度胸がない、気合いが足りない、これじゃハルオの相手になれない。好き放題言ってくる。

ム力つくから勢いに任せて前に出てしまうと、いいように打たれ続けてしまう。どうしろって言うんだ。

「どうも、こうも、早く私との間をつかんで、確実に打ちに行ける所に潜り込めるようにならないと、いくらでも打ちのめされるわ。カッパしてないで、ちゃんと見極めるようになりなさい」

そうは言っても痛みと悔しさだけでもイラつくのに、さらに好き放題言われていちゃ、カッパとだってする。全く女って奴は口が減らない。

「じゃあ、始めるわよ。今日はいつまで持つかしらね？」組長が木刀を構えて言う。

へーへー。確かに昨日は十分と持ちやしなかったツス。でも、今度はこっちも考えた。少なくとも「口撃」まで喰らっぱなしになることはない。こっちも言葉で仕掛けりゃいいんだ。

「ヘン。組長だって、所詮ババアッス。ホントは息が切れるんじゃないッスか？ 俺が逃げ回って持久戦に持ち込まれたくないから、くだらない挑発、するんッスよね？ 女の浅知恵ってやつッス」
そう言いながら俺は組長から距離を離れていく。これでとりあえず打たれつばなしはさけられる。

「あら、昨日よりは智恵を使うようになったのね。でも残念。私の持久力は半端じゃないの。大体あんたを逃がすほど、私、のろまじゃないわよ」

そう言いながら組長は俺を追いかけてガンガン打ちこんで来た。
は、早ええー！

「オラ、オラ、オラアー！ 私を並みの女と一緒に見ないで！ これでも元は、男だったんだから」

「お、男おー？」

打たれるのを承知で、俺は手を前に出し、待ったのしぐさをする。
組長の手がようやく止まる。

「あら？ あんた知らなかったの？ この身体は手術と薬で維持してるのよ」

「それじゃ、その胸も二セもんッスか？ 俺、そういうのマジ駄目なんッス！ ほら！ ジンマシンが！」

俺はオ○マが死ぬほど嫌いだ。おネエ系ブームも理解できない。
身体が拒絶してジンマシンが出るくらいだ。

「ふーん。ジンマシンが出てても冷静でいられるなら、間違いなく型は身につきそうねえ」

そう言って組長がニヤリと笑う。い、嫌な予感が……。

組長は突然着物の襟を開き、二セの胸を強調して裾までまくってしまう。（おそらく）シリコン入りのふくよかな胸と、鍛え抜かれた男の足があらわになって、俺は思いつきり怖気が走った。

「あんたが慣れるまで、これでシゴいてあげましょうね」

組長はニッコリして、俺に木刀を振りおろしてくる。

「ギ、ギエー！」

こ、この組長、オオマのドSかよ！ 俺、入る組を、絶対間違えた！

たすけてくれえー！

土間の日常

「何やってんの？ 土間」

稽古中、私が智を追いつめて、智が壁際で白目をむいたところで、何故か礼似に声をかけられた。

「あんたってそんなに飢えてたの？ ダメよ、組の若いのに手をつけちゃ」

「違うわよ。見ての通り、稽古中。二セの胸が苦手って言うから、慣れるようにシゴいてやってるだけ。礼似こそ、一樹さんまで連れてなんの用なの？」私は一応、はだけた襟を直して聞き返す。

「えーっと。ちょっと友人として、お願いがあって」

こんな言い方する所を見ると、ロクなことじゃないな。一樹さんを連れてくるのも、あやしいし。

「とりあえず智を解放してやったらどうです？」同情するように見下ろしていた一樹さんがそう言う。

「あら、面白かったのに。一樹、トラウマでも感じるの？」礼似が聞く。

「ちがーう！ 誤解を広めるような事を言うんじゃない！」一樹さんが怒鳴る。

「噂は聞いているけど。あんた達の方こそ、お盛んねえ」

噂では礼似が組長室に一樹さんを夜な夜な引つ張りこんで、色々ど……その、襲いかかっているらしい。人の趣味だから別にいいけど。

「ソフ。そう？」

一樹さんは「誤解だ！」「そこは否定しろ！」とか、怒鳴っているけど、礼似はさらりと肯定しているし。

「こんな話をしに来たんじゃないだろう！ ちゃんと頼め！」一樹さんは諦めたように話を本題に戻す。

「そうね。土間、悪いけど神社仏閣の修繕できる職人を、御子が育った神社の修理に大至急回してくれる？ あんたならコネもあるでしょ？ 費用は一切、こっちで持つから」

「そういう職人って何人もいないし、手間のかかる作業を頼むから、急につて難しいんだけど」

「それは分かってるのよ。でも、そこを何とか」礼似だけでなく、一樹さんまで手を合わせ、頭を下げる。

「急な修理って、あんた神社で何やらかしたのよ」この様子じゃ、間違いない元凶は礼似だろう。

「大したことじゃないわ。ちよつとバイクで本殿に突っ込んだだけ……十分大したことじゃない。どうやったらそんな事になるんだか。バチが当たりそう。」

「その神社が頻繁にお世話になっている会社の社長の息子が、そこで結婚式、あげる予定なのよ。なんでも占い好きの社長らしくて、お気に入りの占い師にそこで式を挙げるのが一番いいって言われたから、どうしても来月式をあげたいんだって。神社の方でも人脈的にも、収入的にも、式を挙げたいらしいの。それでなくても御子、あそこの神主と折り合い良くないから、なんとかしなきゃならないの」

「そついう折り合いの悪い、御子が神経使わざるを得ないところで、礼似、何やってんのよ」

「ごめんー。悪意は無いのよ。真見のお宮参り中に見つけた、さい銭泥を捕まえようとしただけなんだからー」

さい銭のために本殿壊されちゃ、神社は納得しないだろう。御子もこの神社とだけは揉めたくないはず。こりゃ、礼似が泣きついて頭下げにも来るはずだ。一人じゃバツが悪いから一樹さんまで引つ張り出して来たのか。

「仕方ないわね。私とおかみさんが頭を下げれば、頑固な職人も動いてくれるでしょう。あんまり世話、焼かせないで」礼似のためと

いうより、巻き込まれた御子のためだ。一肌脱ごう。

「助かる！ お礼に一樹か大谷、一日デートにレンタルするわ。どつちでも好きに使って」

礼似は二人の人権もかまわず喜んで言う。完全にモノ扱いだ。

「要りません。大体私、男性と付き合いたいと思わないし。ソツチはそんなに女性的じゃないの」

ここで二人が一気に引いた。礼似は顔色まで変わった。

「あんた……その姿で女好き？ そりゃちよつと、マズイわ」礼似が嫌な目つきで私を見る。

「そういう事じゃないの。長年この姿だから、あんまり性別を意識しなくなつたつて事」

「ホント？ これ見て何ともない？」そういつて礼似は自分のヌード写真（！）を私に突きつける。

「何ともないわよ。礼似、あんたこんな物撮つて持ち歩いてんの？」

「フツフン。身体は若いでしょ？ ちよつと、お小遣い稼ぎ用だね」

いいのか？ 組長がそんな事して。隣で一樹さんが頭、抱えているんだけど。

「土間つて、昔は女の子と結婚してハルオも生まれてるんだもんね。ホントは私みたいな美女がそばにいて、嬉しいんじゃない？」礼似はしつこく私の前で、写真をひらひらさせる。

「結婚していたのはずつと昔の話。それに富士子は結婚した時ハタチだったし。あんたみたいなおばさんと一緒にしないの」私はぴしやりと言つてやった。

すると礼似はむつとした顔をして、「ちよつと待つてなさいよ」と言つて稽古場を出ると、しばらくしてから戻つてきた。そして、手にした紙を私に突きつける。さっきの写真のコピー？

私は仰天した。なんであんたが富士子のヌード写真を持つてる！「やーい、引つ掛つた。私の写真に富士子さんの顔のコピーを張つ

ただだよ。私の身体は若いんだからね！　こんな簡単な手に引っかけた……あれ？　土間？」

れ、礼似。なんてことする！　もう私、身体だけは女なのに！　あ、鼻血出てきた。気が遠くなる。

「なんだあ。土間って、結局、ただのロリコンだったんだあ」

遠のく意識の中で、礼似のあきれたような声を聞き、私は気を失った。

静の日常

「師弟そろって稽古場で倒れたって言うから、何事かと思えば。あんまり余計な心配、かけないで頂戴」

私は自分の後を引き継いだ現組長で、義理の妹の夫だった、今は女性の姿をしている（ああ、ややこしい）土間に説教をしていた。

「おかみさん。どうも、ご心配おかけしました。つい、油断しました」

土間は殊勝に謝っている。私はもう、おかみさんと呼ばれる身ではない気がするのだけれど、彼女が「彼」だった頃から（本当にややこしい）そう呼ばれているので、お互いに癖になっちゃってしまっている。

「あなたは昔から考えなしにカツとなる人だから。勢いだけで組に入れてくれと頼んだり、刀を取り上げられても喧嘩に飛び込んだり、妻の妊娠中に仇打ちにまで飛び出すし。拳句、心は男のままなのに、女性の姿に手術までしてしまうし」

「はあ……」

土間はあいまいに相槌を打つ。きつと、また始まったと思っっているに違いない。私は土間に説教する時には、このあたりの事を言わずにはいられない。だって、その後、本当に大変だったのだから。

「身体の力なんて必要ない。心の強さが欲しいと言う、あなたの気持ちは分らないでもなかったけれど、精神が男性のまま、肉体だけ女性になったのはやっぱり無茶過ぎたわ。辰雄がピンチの時には力ではどうにもならないからって、ダイナマイト、身体に巻きつけたって言うじゃない。そんな精神構造じゃ、男の身でも女の身でも一緒でしょうが。本当に頭に血がのぼると、厄介な人なんだから」

「いえ、でも、こうして女になったからには、私は女らしくなってます！ 私は富士子のように、力に頼らない、心の強い、女になるのが目標なんです！」

そついいながら土間は、両手の拳を握って、目いっぱい「男らしく」力を込めて言う。力が入り過ぎて腕にコブまで浮き上がってしまふ。そーいうところが問題だつていうのに。

大体土間は、富士子さんを理想化し過ぎなのよねえ。血が上りやすい上に若くして富士子さんを亡くしているものだから、彼女の「アラ」が全部吹き飛んでしまつて、ほとんど神格化してしまつてゐるわ。

土間がこの手の事で、鼻血を出してひっくり返るのは、若い頃には頻繁にあつた事。

なにせ、精神は完全に男性で、性的にも間違ひなく男性的な人間が無理やり女性の身体になつてゐるのだから、肉体的には相当に無理がある。でなくても彼は若い頃には口説き上手でモテていたし。つまり、本来女性への興味は強い方だつたと言う事でしょね。

おかげでこつちは土間の世話には随分追われたわ。女性のスカートが風にひるがえつては倒れ、男の多い組の中で、その手の雑誌を見つけてしまつては倒れ、夏の女性が薄着になる季節になれば、外を歩くだけで倒れ（何を考えていたんだか……）。

周りの私達も慣れるのには苦労したもの。男だらけの中で、腕っ節は強いとはいへ土間の見た目は女。暮らしているうちに、つい、気も緩んでくる。

幾度、脱衣所で騒動があつた事かしら。彼に女性のしぐさや、身のつつしみ方を教えるのに、どれだけ苦労させられたらう。思えば戦いの毎日だつたような。

それでも月日が経つうちに、心が落ち着いてきたのか、自分の身体で慣れたのか（そついいえ、初めのうちは、風呂でのぼせる事も多かった）そついう事態は起こらなくなつていた。そこにいたるまで、土間にも、組の連中にも、涙ぐましい忍耐の日々があつた。

でも、これほど時間が流れても、やっぱり中身が「男」である事

に変わりはないのね。こんな事がまだ続くのでは、先々色々心配だわ。

「土間、あなたが求めているのはあくまで、精神的な強さでしょう？　もう、女にこだわる必要、ないんじゃない？　身体を戻す事は出来なくても、無理に女性的になろうとするのはやめたらいいんじゃないかしら？」

と、いうか、頭に血がのぼると女性的じゃなくなってしまうし。すぐ、のぼせる性格も直ってないし。

「いいえ！　私はそんな、半端な気持ちで女になった訳じゃありません。努力と、気合と、根性で、この身体に見合う、立派な女になつて見せます！」

その台詞を言っている姿が、顔に青筋立てて、すでに男性的な表情になつていただけ。そもそも女らしくなるのに気合と根性が必要な時点で、どうかとも思ふのだけ。

「分かった、分かったから。あなたの場合は、男だ、女だと言う前に、その頭に血がのぼる性格をなんとかしないと」

すつかりのぼせて、力の入っている土間に、私はなだめるように声をかけた。土間の方でも「ハッ」と我に帰ったようで、

「すいません。性別の問題じゃありませんでしたね。この気性は、本当になんとかしないと」

と、ようやく本当に反省すべきところに気が回った様子。分かつてくれたのかしら？

「心頭滅却。心の鍛え方が足りないんだわ。失礼します。稽古してきます！」

いえ、そのノリがすでに、のぼせている感じなのだけど。でも、土間はさつさと稽古場に戻って行く。

「あー！　土間、見てみて、私の傑作合成写真の、第二段！」

礼似さんの興奮した声が聞こえたかと思つたら、直後にドサリと大きな音が。

「大変ッス！ 組長がまた、倒れましたー！」 智の叫ぶ声がある。
ああ、この組の先々が本当に心配だわ……。

一樹の日常

まったく礼似の組長としての自覚のなさには悩まされる。華風組を出てからすぐ、俺は香に礼似の部屋の「ガサ入れ」を命じ、俺自身は大谷と共に組長室の探索をおこなった。

本当は礼似の部屋も自分で家探したいくらいだったが、礼似が香と共に住んでいる以上、そこは自重した。香も礼似の部屋を堂々と引つ掻き回せるので、興味シンシンで探し回ってくれたようだ。

「いいじゃない。どうせ顔を張る稼業なんだから、顔売ってもかまわないでしょ？」と、礼似は言うが、そうはいかない。組長が自ら安っぽい顔の売り方をしてどうする。組の威厳に関わるだろうが、俺は容赦なく礼似のあやしい写真の束をシュレッダーにかける。

「もったいないな！。プリントするのだって、用紙代やインク代が結構かかってんのに」

「こんな小遣い稼ぎより本業に精を出せ。大体、これからは身の周りに注意しろと、就任前から言っただろう。軽々しく写真をバラまかれちゃ、お前の身を守る役目がやりにくくて仕方がない」

「自分の身は守るわよ。ちゃんとしてたじゃない。それこそ、ここに閉じこもりつきりで」

ああそうだよ。そのついでにここで写真をプリントしては、末端の奴等に売りさばかせていたんだから、夕チが悪い。

「ハルオに組の内部を探らせたのは正解だったな。下っ端達がお前から売り歩くように言いつけられていた写真、全部見つけ出したぞ。油断も隙もあつたもんじゃないな」

「もう。いつの間にハルオと香を手なずけたのよ」礼似が人聞きの悪い事を言う。

「こいつらの方が常識も危機感も持つてただけだ。お前の常識が外れすぎなんだ。おかげで組中、お前の事で噂だらけだ」

「ほっとしても噂なんて立つじゃないの。第一最初に噂が立ったの

は、香達のせいでしょう？」

言われた香とハルオが縮こまる。そうだ、こいつらが噂の原因だ。だが、ごまかされないぞ。否定もせずによけいな誤解を（かなり意図的に）広めたのは礼似だ。それに、

「そもそもお前の妹分のしつけがなってないせいだろうが」香も結構、好き勝手な事を言ったらしい。

「ハタチすぎた娘のしつけなんて、誰がするのよ？ どうせ、人の口に戸は立てられないし」

「度が過ぎると言ってるんだ。お前達が尾ひれをつけたおかげで、俺と大谷はお前のオモチャにされている事になっているし、写真で稼いだ金で組長室の奥には、全面鏡張りのベッドルームがあるとか、ガラス張りのシャワールームをつけたとか言われているぞ」

「あら、シャワールーム。いいわね。ホントにつけない？」

「つけない！ お前のせいで神社の修理代だつてかかるんだぞ」

「ケチね。こんなにいいスタイル拝めるのに。土間や御子、香なんか目じゃないわよ」

その時、礼似の自信過剰な台詞に、ハルオが冷や水を浴びせた。

「れ、礼似さんより、か、香の方が、ウ、ウエスト、ほ、細い……」

「ちよつと、ハルオ。いつの間に、私に断りもなく香を脱がせた？」

礼似が喰つてかかる。断るバカもいないと思うが。

「ち、違います！ い、今の礼似さん、こ、この写真より、ふ、ふくよかに、み、見えるし」

礼似が慌てて香のウエストに目をやり、自分の腰に視線を向ける。服の上からだって、分かるものは分かる。言葉にする勇気が俺にはハルオほど無かっただけで。

「うん。私も礼似さん、最近太つたなって思ってた」香も同意する。礼似は血の気が引いていた。

「ちよつと！ 一樹！」何故か礼似は俺に怒鳴った。

「あんたが私をこんなところに閉じ込めたせいで、こんな事言われてるじゃない！」

「閉じ込めたって。ここで仕事をするのは組長なら当然だろうが」俺の反論を礼似は全く聞かず、

「ああ、運動不足の上、市販の弁当ばかり食べていたせいだわ。これは一樹が責任取ってくれないと」

なんて言っている。弁当食ったのは自分じゃないか。八つ当たりだ。

「俺にどうしろってんだ？」

「前に関口が根城にしていた潰れたジム、まだ買い手がついていないわよね？ 大至急、あれを買い取るのよ！ これから毎日通うわあそこのオーナーは私。いいわね！」

「礼似さん。それって、職権乱用」香でさえ、そう言っている。

「そうだ、公私混同だ。今時潰れた郊外型ジムなんて、どう経営する気だ？」俺も負けじと言い返す。

「そんなの、頭の切り替え次第よ！ ああいう所はハードより、ソフトが大事なの！ 一樹、あんたの情報力で超一流どころのインストラクター、引きぬいてかき集めるのよ！ ホントに質のいいサーブスには、人はちゃんとお金、出すんだから！」

「いくら俺でも、そんなコネ、持ってるわけないだろうが。それにあそこじゃ、交通の便が悪すぎる」

すると礼似は俺の胸ぐらつかみながら叫んだ。いかん、目が血走っている。

「コネがないなら、今すぐ作んなさいよ！ 足が悪けりや、組員全員に会員のアッシー、やらせるまでよ！ 私の体型が元に戻らなかつたら、私がこの組をぶつ潰してやるから！」

ダメだ。礼似の奴、完全にキレてる。この分だと、本当に組をメチャクチャにしかねない。

これだけ必死なら、自分の体型もかかっているし、ジムを買って

も死に物狂いで成果を出すだろうが、俺達、こんな事にこき使われていて、いいのか？

会長、本当にコイツが組長で、よかつたんですかー？

大谷の日常（前書き）

ほどほどにご想像下さい（笑）

大谷の日常

俺は礼似の急な組長命令で、郊外にある、ジムの売買契約のため、不動産業者との交渉に当たった。この組で不動産業に一番顔が効くのは俺だからだ。

交渉と言っても、買い手がつかずに放り投げられていた物件だ。

以前、関口が礼似達相手に起こした誘拐事件がらみの乱闘が起こった事もあって、物件価格は落ちる一方だったから、少し押したら向こうもこちらの言い値で、二つ返事で承諾した。

俺はこの件にこれ以上手を出す気は無い。これは礼似の気まぐれでやっている事なのだから、自分の舎弟をこの件に使う気は無い。ましてや、このジムで儲けを出そうなんて無茶は考える必要もない。買い叩いたジムだから、土地代のもとさえ取れば十分だし、営業の採算は礼似達に責任を取らせる。いくら組長とはいえ、金の事は金の事。礼似も元詐欺師だっただけに経済感覚はそれなりにあるから、赤字は出さない程度の事はするだろう。

気の毒なのは、礼似に振り回される、一樹や、下っ端達だろう。たぶん彼らは一銭の得にもならない営業に、タダ働きでかけずり回る事になるのだろう。

すでに一樹は畑違いのインストラクターの引き抜きに、業界のコネをつかもうと必死に動いているらしい。俺には関係ない事だが。そう考えてのんきに構えていたら、突然、一樹に泣きつかれた。

「大谷、あんたは噂のコントロールは得意だったよな？ 俺達の礼似にまつわる噂の誤解を、なんとかすることは出来ないか？」

「俺達？ 俺も噂の対象になっているのか？」昔、いい仲だった一樹なら分かるが。

「知らないのか？ 噂なんて本人の耳にだけ入らないのはよくある事だが。あんたが気付かないとは意外だな」一樹は面食らったよう

に言う。

「組の力関係に関わる噂は、大抵耳に入れているはずだが。どんな噂だ？」

「あー、その、つまり……」一樹は決まり悪そうに耳打ちしてきた。「！」

聞いたこつちも仰天する。とても大きな声で出来る話じゃない。

「ソツチの噂は俺も専門外だ。あんたはともかく、なんで俺まで噂に巻き込まれているんだ？」

「俺だつて誤解なんだ！ 多分、俺達が組長室に入り浸っているせいだろう。噂じゃあの部屋の奥には、専用の道具がそろったベッドルームまで出来ている事になっちまってる。あのジムを買い取った一件で、俺達は礼似のいいなりになっている印象を与えたらしい。趣味が加速して、とうとう表沙汰までかしずき始めた、なんて言われてるらしいんだ」

そう言えば最近、舎弟達が俺に隠れてニヤニヤ笑っていたのを見かけた。あれはこの噂のせいか。コトがコトだけに、俺に噂を耳に入れる奴もいなかったらしい。

「俺にその手の趣味は無いぞ。それに、このままでは礼似の命令を受ける度に、誤解が広がって行くじゃないか」一樹に文句を言っても仕方は無いのだが、言わずにはいられない。

「俺だつてそんな趣味は無いし、これじゃお互い面目丸つぶれだ。だからあんたに相談しているんだが」

今の今まで知らなかった話を、急に相談されても困る。

「この手の話は大抵の男が好きだから、広がりやすい上に案外、もみ消しにくい。組の中は男だらけだから厄介この上ない。なあ、何かいい知恵は無いか？」一樹は泣き言を言つて来る。うーむ。

こういう話に反応するのは男の性みたいなものだ。無理にもみ消そうとしても無駄だろう。それよりもっと男心をくすぐる話があればいい訳だ。

「しかたがない。ちよつと、デマでも流してみるか」

俺の画策は成功したらしい。その代わり組の中がそわそわと落ち着きを無くしてしまっているが、それも一時の事だろう。

組の男達は誰もが礼似の視線を気にして、彼女のしぐさや行動をチラチラと横目で見ている。

俺も命は惜しいので、デマを流すのには香を利用した。あの娘なら礼似もどうにもできないはずだ。

「礼似さんも結構飽きっぽいからね。ホントはいろんなタイプを試してみたくて、組の中のめぼしいのを物色してるみたい。幅の広い人だから」

この香の台詞は思った以上に上手い事一人歩きをして、組中の男達が『次は自分かもしれない』と、色めき立ったようだ。

礼似は色気のある美人だから、チャンスがあればと期待も高まるのだろう。俺と一樹の存在など、あつという間に彼らの頭からは消し飛んでしまったようだ。（それも、少しむなしいが）

礼似もふと、

「なんだか最近、嫌に視線を感じる気がするんだけど」と、一樹に漏らしたようだ、

「ダイエツトの効果が出て来たんじゃないか？ 前よりスタイルよくなったから」

と、一樹が言ったものだから、礼似はすっかりご機嫌のようだ。

触らぬ礼似にたたりなし。この組長をうまく操縦するのは、なかなか骨が折れるのである。

礼似の日常

「御子、あの神社の修理、終わったんだって？ いやあ、あの時は悪かったわー。知り合いの社長の息子の結婚式も無事にやれそうじゃない」

私は久しぶりに真柴組に顔を出し、ありったけの笑顔を作って見せた。御子に曰く付きの神社に迷惑をかけているので、思いつきり低姿勢で、柄にもなく、季節のケーキまで手土産に持参している。

「礼似。あんたねえ、土間に頼みごとをしておいて、昔の奥さんをネタにからかったんだって？ 土間ったらぐったりして当分あなたの顔は見たくないって、嘆いてたわよ」

御子は私に冷たい視線を浴びせながらも、しっかり、差し出されたケーキは受取った。

「あれは土間が、勝手に興奮しただけじゃないの。人をおばさん扱いしてハタチの小娘の顔とスリ変えないと、この身体の若々しさに気がつかないなんて、土間の方こそ失礼よ」

私の見た目年齢は、絶対、十歳以上、見ようによっては二十は若く見えるはず。これだけの若さと美貌を保てる女なんて、そういるはずは無いんだから、無反応って言うのは納得いかないわ。

「あんたに反応したっていうより、奥さん持ち出されて単純にショックを受けたんだと思うけど。完全に土間の過去の傷に塩塗ってんじゃない」

「土間の感性が鈍いからよ。ショック受けなきゃ、この身体のセクシーさに気がつかないんだもの」

「あんたの実年齢知ってる上に、土間は性別を変えているんだからしょうがないでしょ？」

「あら、美意識に男も女もないわ。御子こそ、そんな母親モードな顔ばっかりしてたら、良平にかまってもらえなくなるわよ」

そう言つてあらためて御子の顔をよく見ると、御子が随分疲れた顔をしている事に気がついた。

「御子、顔にクマが出来てんじゃない。どうしたのよ？」

御子はさらにため息までついている。

「真見もそろそろ機嫌の良し悪しが出てきたり、夜泣きも始まつてね。でも、良平は私が真見の感情を先読みしてあやしてしまうのを許さないし。いちいち泣かせてからあやすのに疲れちゃつて。このケーキは助かるわ。身体が甘いものを欲しているから」

そう言つて紅茶を入れ終わると、私が口をつけるのも待たずにケーキを口に運んでいた。

「えー？ バカみたい。良平の言う事なんか無視して、真見の機嫌を取っちゃえば？」

「そうもいかないわよ。二人で決めた事なんだから。それにね、真見も本気で機嫌が悪いと良平が抱いてあやしても泣きやんでくれないの。私の方が真見の機嫌の加減が分かっちゃうから、私に抱いて欲しがる時もあるのよ。赤ん坊に遠慮は無いから、私が抱くとピタリと鳴きやむでしょ？ そのたびに、良平がいじけちゃつて」

それで両方のご機嫌を気にして、御子が疲れちゃつてゐるわけか。

ああ、男つてめんどくさいなー。

「男が父親になるにはそれ相応に時間がかかるから。今は子育てと父親育ての時期つてわけ。そんな時にあんたは神社でトラブつてくれるし、土間はあんたの事でグジグジ愚痴を言つてくるし」

あ、まずい。御子の声のトーンが落ちてきた。土間も御子に愚痴らなくてもいいのに。これは相当機嫌の悪い所に顔を出しちゃったみたい。

すると、唐突に御子が私に言った。

「食べ物に釣られなくて悪かったわね。言葉で煙に巻かれるほど、私も甘くないわよ」

「ちよつ、私まだ、そんな事考えてもいないのに」今、考えようと

はしたけど。

「真見と一緒にいると、力なんか使わなくても勘が冴えわたるのよ。本人が考えるより先に、思考が読めちゃうの。良平にも、いじける前に『いじけるな』って言っちゃうから、余計にへこまれるし」

ひえええ。そっか、赤ん坊には遠慮がないから、真見が感じ取った感情、ストレートに御子に伝わっちゃうんだ。こりゃ、良平も大変だ。

「悪かったわね。人間離れした、ひねくれ者で。あんたに人の亭主を物好き扱いされたくないわ」

そんなこと考えちゃいないわよ！……まだ、だけど。

「うつとうしくって悪かったわね！ あんた、私にまで傷口に塩を塗りに来たわけ？」

御子のイライラを代弁するように、とうとう真見まで派手に泣き始めた。

「つ、疲れているみたいだから、また、今度来るね。今日は失礼するわー」

冗談じゃない。こんな調子でボルテージ上がられたんじゃ、御子に爆発されかねない。真見とセットでこんなに力がパワーアップされるとは思わなかった。御子は胆も太いし人一倍体力あるから、子育てだって余裕だろうと思っていたら、意外な盲点があったもんだわ。

私は大慌てで真柴組から退散する。しばらくここには近づけないわ。香に様子をうかがってももらわないと、半殺しの目にも会いかねない。乳飲み子抱えた母親に手を出すわけにもいかないし。

土間は神社の件で御子には何度も会っているから、今の御子の状態の事も知ってるはず。この間の仕返しに、わざと私に黙ってたんだわ。十分、恨み、はらしてるじゃない。

まったく、二人とも一筋縄ではいかないわ。私なんて可愛いものよ。

最強の「おネエ」に、最強の「母親」。この二人に肩を並べて、ドレミを名のるのも楽じゃないんだからね！

良平の日常

「乳母車が欲しいって？」ウチの組長が、俺に聞き返す。

「あの、乳母車というか、ベビーカーを買いたいんです」

正直ウチの組の経済状態は、余裕があるとは言いがたい。固いシマをもっているので安定はいいが、それほどボロい儲けがある訳じゃない。

勿論俺や御子も自分達の取り分は受取っているが、組員を養っているとそう、多い額ではない。真見は女の子だから大人になっても組に残るかは分からない。先々の事も考えると、ある程度の教育も受けさせたいし、でなくても事情のある子だから、金の事で人生の幅を狭めたくないのが親心。

だから始まったばかりの子育てに、ある程度の出費は仕方ないとはいえ、なるべく無駄遣いは避けてやりくりするように努力はして来たのだが、今回は組長に頭を下げて、かわいい孫のために財布のひもを緩めてもらおうと思った。ようは、ジジ心に訴えて（情けないが）スネをかじろうと言うわけだ。

「それはかまわんが、お前達がレンタルで十分だと言ったんじゃないか？ それに、真見を乳母車に座らせるのは少し早くないか？」

組長がいぶかしく思うのも仕方がない。どうかすれば「真見のために」と金銭感覚を狂わせて、何でも買い与えようとする組長を、（金でつられてたまるか！）と、押しとどめていたのは俺なのだから。

「あの、乳母車じゃなくて、ベビーカーなんです。今時のベビーカーは種類も豊富で、新生児から寝かせて使えて、成長に合わせて座らせることのできるタイプもあるんです」

口で説明するだけではなく、パンフレットの写真を見せてあれこ

れ特徴を解説する。まるでセールストークだ。要らないと言ったものを買ってほしいと頼むのだから、より、丁寧に説明した。

「これがあれば、御子も気がねなく散歩に出やすくなると思います。レンタルのように、汚れや、傷に気を使う事もありませんし、お義父さんとの散歩の回数も、ずっと増えるでしょう」ズルイとは思いますが、ここで殺し文句も使う。

真見を育てるのは二人で一緒に。御子にばかり役割を振らない。

その代わり、俺にも父親の威厳と存在感を真見に与えるべく、可能な限りのスキンシップを取る。そして何より、御子は『力』を使わない事。これが真見を育てる上で、二人でかわした約束事だった。

生まれた以上は父親の責任は黙っていたってかかってくるんだ。だったら、主導権を母親ばかりに取らせては、俺は損な役回りにもなりかねない。でなくとも母親には授乳という強みがあるし、御子にはお義父さんという強い味方もいるんだ。

決して真見を、母親べったりな子にはさせないぞ。今の世の中、「イクメン」なんて言葉もあるんだ。父親の子育てが、母親のおまけみたいに言われた時代とは違う。親の心が分かる真見だからこそ、この子は「究極のパパっ子」にして見せるぞ！

真見が生まれた時そんな夢も描いていたんだが。赤ん坊って奴はそんなに甘いもんじゃないらしい。

とにかく泣く。すぐに泣く。突然に泣く。

赤ん坊は泣くのが仕事。理屈では分かっちゃいるが、こんなに泣くとは思わなかった。

生まれたての時なら泣き声も「ほやあ、ほやあ」と頼りなく、可愛いものだった。それでもこっちはミルクか、おむつか、寂しいのかと、いちいち気をもんだものだ。

多分御子には分かっているのだろうが、そう思うと悔しいので、あやし役は可能な限り俺が率先した。勤め人ではない立場が、人生

で初めて生きると思っていた。

ところがどうやっても泣きやまない時が多々ある。抱き方、あやし方、色々工夫しても効果は無い。

抱き癖がつくと言う話を聞いて、簡単に御子には抱かせないようにしていたのに、それでも御子が抱くと、真見はピタリと泣きやんでしまう。それどころか二人揃って『力』を合わせて、俺のいじけ具合まで見通してしまう。こっちの下心……もとい、親心なんて筒抜けのようなのだ。

泣きやんでくれと必死で祈っているのに「かえって疲れる。私にあやさせてくれれば早いのに」と、御子の奴は見透かして言うし、組長さえ真見があんなに大泣きしても「ハルオの時より、腹筋がある」なんて平気な顔をしている。こっちはノイローゼになりそうだってのに。経験者は神経が太い。

「外の空気に触れれば、母子ともに気分がいいでしょうし、俺の苛立ちを感じる事もないでしょう」

真見はおそらく、俺が思うように出来ない苛立ちに反応している。それが御子には伝わっているのに、閉じこもった中で俺の意地に振り回されて疲れている。やっとそこが分かってきた。

「良平もさすがに限界か？ 生みの母親に張り合おうと言うのが、そもそも無理なのだ。子育ては母親にはかなうものではない。真見の事は、わしと御子に任せればいい」

やっぱり言われてしまった。組長の顔も、心なしか、緩んでいるように見える。真見を通して俺のもくろみは御子にバレているし、悔しいが、ここは降参するしかない。

「その方がいいようです。父親の出番なんて、まだまだこれからいくらかもあると思いますし」

御子の二番手、へたすりや組長にも抜かれて、三番手になりそうで焦るのだが。

「その通りだ。だが、わしが買ってやる物は真見の手元に残るし、

御子にはかなわずともいずれ、『究極のジジっ子』になるかもしれんがな」そう言って組長は余裕の笑みを浮かべている。

チクシヨ―！ 組長もそこを狙っているのか！ 新米だと思って、実の父親を舐めるなよ。負けん！ 俺は負けんぞ―！

真柴組長の日常

孫は可愛いもの。話には聞いていたが、目の前に小さな赤ん坊がいると、本当に可愛い。

現実的には御子も良平も実子ではないのだから、血の繋がった孫という訳ではないが、そんなことはどうでもいい。わしはこの子にとって、生涯「ジイジ」でいられるのだから。

何よりこの子は、わしに取って初めて、自由に、気兼ねなく愛情を注げる赤ん坊だ。

御子も少女の時から育てていたし、ハルオも赤ん坊の時から組にいた。その点ではこの子はこの組にとって三人目の子供の様なものだろう。

だが、御子は特殊な子だった。ここに来た時にはすっかり心を閉ざしていたし、心を開いてもらう過程でも、他人が御子のように心を読む訳ではない事を、真に理解するよう努めなくてはならなかった。

わしは御子のすべてを理解できる訳ではない。だが、御子のすべてを受け入れられる。それを心から分かってもらうだけで時間が過ぎてしまい、気づけば御子は大人になってしまっていた。

次にハルオを迎えたが、この子は本当に預かり子で、華風組も事情が許せばハルオを呼び戻すつもりがあつたようだ。その辺の事もあって、亡き妻もハルオには「いつか手放す子」として接するように、心を抑えて育てていた。そんな彼女を気づかい、自分も愛情を真っ直ぐ注ぐ事が出来なかった。

しかし、ハルオは帰る事が出来ず、妻も亡くなり、それでも子供の成長は待つてはくれない。ハルオもあれよと言う間に成人してしまった。

だが、真見は違う。血の繋がりはともかく、御子の生んだわしの孫として、ここに迎え入れた子だ。

誰に遠慮する事もない。自分の初孫として、思い切り愛情を注いでやる事が出来る存在だ。

そう考えると感慨も深くて、真見が何をしようと、どんな顔をしていようと、皆、愛おしく思える。

良平は愛情が空回りするのか、真見の泣き声一つにも一喜一憂しているが、そんなもの、まだまだ甘い。これから遠慮のない、だが、愛らしい我がままという自己主張だって始まるし、軽い病気や怪我だってついて回る。親の期待を良くも悪くも裏切り続けるのが子供と言ふものだ。

わしにとつては真見の泣く姿も可愛いし、不機嫌さも自我の芽生えに思えて愛しい。見当はつかずとも、不満を感じて泣きだすのなら、感受性が豊かになっているのだらうと、嬉しくなるし、それで母を求めて泣くのもいじらしく思える。良平のように母親と愛情を競っているようではまだまだ、本当の親になるまで時間がかかりそうだ。

そんな新米親父が相手なら、わしにはまだまだ有利だらう。わしには真見がどんな境遇に陥ろうとも、味方をし続けてやる覚悟がある。勿論、御子や良平にもあるのだらうが、親である彼らはそんな事態に真見を陥らせない事の方に神経を注ぐだらう。

だが、わしはそっちの責任は親の二人に任せる。ようやく手にした愛を注げる子だ。老い先短い老人の我がままを、ありつたけ真見への愛情に向けさせてもらう。こっちは人生の先が見えている分、切実なのだ。親より時間がない以上ジジ馬鹿を競って何が悪い。

しかし、御子はわしを生意気にもたしなめようとしてくる。

「お義父さん。あまり良平に張り合うようなこと、言わないでくれる？ 良平も真見の事になると、すぐ、ムキになるんだから」

「張り合っなどおらん。良平より、わしのほうに真見の関心が向

いてしまつのは、あいつに余裕がないからだろう。祖父が孫を可愛がるのは当然の権利だ」

だからこそ、良平は散歩にもついて来られないのだ。わしは今、真見を連れた御子と共に、午後の陽ざしを満喫しているが、良平は自分の苛立ちを真見に見抜かれたくなくて、断念したのだ。

「真見を可愛がるのに、権利を振りかざすようじゃね。そう言う意味の悪さ、真見、すぐ見抜くようになるわよ。良平の苛立ちに戸惑つてるだけで、別に嫌つてゐるわけじゃないんだから」

「なんの。余裕のない良平に比べれば、真見もこの、ジイジのそばの方が居心地がいいでちゅよねー」

そう言つて乳母車の（赤ん坊を乗せるのは乳母車と昔から決まつてゐる！）中の真見を覗きこむ。

「そうでもないみたいよ。お義父さんが良平と張り合つてゐるの、何となくわかつてゐたいだから。お義父さんが張り合つのを察知して緊張するから真見、ぐずりだすのよ。良平のせいだけじゃないわ」ギクツ。確かにわしと良平がいると、緊張感が漂つてゐるような「思い当たる節、あるみたいね。今だって、真見、お義父さんをうつとおしがつてゐる気配があるわ。ホントはパパと、ジイジが仲良く笑つてゐる方が、真見は嬉しいんだもんねー」

そう言いつつ御子が真見を抱き上げると、真見は機嫌よさそうに笑顔を見せる。

「つまらない意地の張り合いしてると、二人とも真見に嫌われるわよ」

そ、それは。それだけは避けたい。孫に嫌われてなんの生き甲斐があるものか。

「そんな事は無いでちゅよね？ 真見ちゃんは、ジイジの気持ちが分かる、優しい子でちゅよねー」

必死に真見にそう、訴えかけるが、

「それでちゅよー。だからパパの気持ちも分かる、優しい子なんで

ちゅよー」

と、御子はわしの顔も見ずに言っている。ええい、お前は所詮、良平の味方か！

「あら、私はどっちの味方でもないわ。真見の気持ちを代弁してるだけでちゅよねー。ママと真見は、心が通じ合っているんでちゅからねー」御子はそう言ってケラケラと笑っていた。

クウッ。千里眼の母親には歯が立たんわい。せめて、せめて良平にだけは、負けてたまるかー！

倉田の日常

「これまた、今度も派手に痛めつけてくれたな」言葉とは裏腹に俺はつい、笑みを漏らした。

「倉田さんすいません。直す先から傷つけてばかりで」良平は小さくなって頭を下げる。

良平の義足を外して状態を確認すると、ものの見事な刺し傷や、削り傷が目に入った。

今度は爆発物に入っていた金属の破片や、釘などが刺さったらしい。木製部分は刺し跡だらけで、接合に使っている金具も緩んだり、歪みが起こっている。また、派手にやったもんだ。

「なあに。道具は使ってこそ役に立つ。俺は飾り物は扱わない主義だ。この義足が痛むのはお前さんが積極的に生きている証拠だろう。かえって嬉しいくらいだ」

俺は良平への気遣いだけではなく、心からそう思う。俺が昔携わってきた人斬り道具は、役に立てばたつほど、誰かを苦しめ、誰かを不幸にして来た。だが今の仕事は違う。

「俺の仕事が人様の人生を豊かにする日が来るなんて、若い時には想像もできなかったもんだ。しかも、他の義足なら他の誰かでも修理が利くが、お前さんの義足は俺が直すのが一番いい。直す人間に限られるのは道具としちゃあ半端なんだが、こんな風に頼られるなんて、職人冥利に尽きる」

「倉田さんの腕は一流ですよ。妥協もないし、どんな条件でも叶えるための手段をつくしてくれる。俺が真柴に残って妻子を持てたのは、倉田さんのおかげです」

「そう言ってくれると嬉しいよ。どうだ、赤ん坊も生まれたばかりで、大変だろう？」

良平が俺の工房に来た時から疲れが顔に出ていた。身体より気疲

れたような表情だ。

「はあ。赤ん坊なんて、今まで気にとめた事もなかったですからね。何をされても心配だし、どうしたら喜ぶのかさっぱりだ」

「それがいいんだよ。俺たちみたいな奴は結構世間知らずだ。特に
お前さんは若い時から組一筋で、連れ合いだって御子さんを選んだ。
自分の価値観が通用しない相手に振り回される経験なんて、少な
かつただろう？」

「そう言われれば、そうですね。特に最近は何、自分の下の人間ば
かりに囲まれちゃった」

「俺も、刀研ぎの時はそうだったよ。足を洗って義足作りの教えを
請うようになって、初めて知った世界がゴマンとある。目が開かれ
るってのはいいもんだ。赤ん坊の真っ白な魂相手じゃ、すべてが新
鮮に感じるだろう。しかも女の子だろう？ 可愛くってしょうがな
いんじゃないか？」

ここで良平の目じりがはつきりと下がる。決して若いとは言えな
い年に出来た子。どれほど喜んでいるかが、自然と伝わってくる。
ようはデレデレしているんだが。

「まだまだ、男とも、女とも、見わけがつかないような感じなん
です。親から見れば可愛いもんです」

声も抑えて、口元も懸命に引き締めようとしているが、目じりの
下がりが普通じゃない。どうせ抑えの利かない緩み具合なのだか
ら、諦めればいいんだが。これじゃまるで百面相でもしているよう
だ。

「結構、結構。理屈の通じない赤ん坊に、思いつき振り回されて
おけ。下手な女作るより、よっぽど人生の勉強になる」良平の幸せ
そうな歪み顔を見ると、つい、からかいたくなってくる。

「その手の冗談は、御子がいる時には言わないでくださいよ。あい
つ、今、普通じゃないから、冗談でも殺されちゃう」下がった目じ
りが元に戻り、顔色を変えて良平が言う。からかいがいのある奴だ。

「彼女は千里眼だったな。娘も受け継いだそうじゃないか。これならお前さんの気の迷いも起きないだろうし、娘も下手な男に引っ掛かる事がなくていいだろう」

「いや、そこは本当にまいってるんですよ。あの母娘、一緒にそばにいと、力が相乗効果で異様に強力になるんです。俺がまだ考えでもない事さえ、先読みしちゃう。理性の働く暇さえないんです。実は今日もたまらずここに逃げて来たんです。そのくせこっちは向こうの考えが読めないんですから」

「だったら、お前さんがせつせと娘の世話を妬く事だな。一緒にいるほど読まれちゃうなら、それしか手はあるまい」

「でも、おむつやミルクはともかく、他はどう扱ったらいいか、さっぱりわからないんです！」

おお、コイツがこんなにうるたえるところが見られるとは。これは面白い事になってくれた。

「そんなの、俺だって知る訳なかつたが。せいぜい娘の機嫌を取るのに慣れる事だな。ただ、慣れる頃には大人になって、どこかの男が娘をかつさらって行くんだろうが」今度は俺の方がニヤニヤする番だ。

「生まれたばかりなのに、そんな、嫌な話、しないでくださいよ」
「贅沢な奴だ。この世界じゃそう言うありきたりの幸せを持てる奴は、そう、多くは無いんだぞ。そういう苦労なら喜んで味わえばいいんだ」半泣きの様な良平に言っただけのも、半分は嫉妬が混じっている。

「分かってますよ。だが、俺は真見をそう簡単にかつさらわれたりはしませんから」

相手が妻子ではないとなると、いきなり自信を取り戻して胸を張る。そこもおかしい。

「お前ならそうだろうなあ。だが、お前自身も精神をしつかり鍛えないとまずいんじゃないか？」

「精神？ 俺、だらけて見えますか？」良平は不満そうに言う。
「そうは言わないが、娘はお前の心を読めるんだろう？ 普段から不埒な考えを持たないようにしないと、あっという間に娘がマセて、男が寄ってきちゃうぞ」

良平の顔がみるみる青くなる。血の気が引く瞬間って、こういうもののなか。

「俺……、どこかの禅寺で、修行させてもらおうかな……」

まいつてるなんて言っていた事も忘れてつぶやく良平に、俺はつい、吹きだしてしまった。

美羽の日常（前書き）

こてつ物語2に出てきた美羽の、その後の消息です。（笑）

美羽の日常

「きゃー！ ホントだ！ ホントに本物の赤ちゃんなんだあ」

私は思わず歓声を上げた。こんなに小さな赤ちゃんを見たのって、初めてかも。

「ね？ ね？ ちょっとだけ抱っこしてもいい？」 そう言いながらも先に手が伸びてしまった私に、御子さんは赤ちゃんを私に抱かせてくれる。ちよつと、甘いような匂いがした。

「かーっわいーい。結構、重いんだー」私はすっかり舞い上がってしまった。

「で、何で私が子ども生んだって知ってるの？」 御子さんが啞然とした顔で私に聞く。

「この間、こてつと由美おばさんにばったり会って聞いたんだ。あのコンビ、相変わらずだねー。私、友達んちに寄るからいつもと違う駅で降りたのに、そこでこてつに出くわしたの。私は電車で帰ったけど、由美おばさん、こてつ連れだったし、絶対歩いて帰ったよ」
「奥様の出好きも、とめどがないから。それでわざわざ真見の顔見に来たの？」

「そうだよー。あ、そうだ。おかーさんに持たされてたんだ。商品券だから必要なものを買ってって」

私は舞い上がっていたのですっかり忘れていた白い封筒を、赤ちゃんを御子さんに返すと、カバンの中から引っ張り出した。学校帰りに寄ったので、まだ制服姿のままだ。

「お母さんって、ひよつとして」

「うん。沖のおかーさんね。沖さんも、おとーさんって呼んでる。

沖さんちは学校に行く駅にも近いから一緒に住んでるんだ。籍はまだなんだけどね。まだ、ちよつと呼びにくいんだけど、そのうち慣れるよね」

ホントは呼びにくいって言うよりも、照れ臭かったり、前の父さん、母さんとダブるようで呼ぶのにためらっちゃうところがあるんだけど、おとーさんが「きつと慣れるから、少しずつ呼んでくれればいい」って言うてたから、出来るだけ早く慣れちゃおうと思う。

「でも、おばさん、本当にお母さんになったんだね。由美おばさんから聞いた時は絶対嘘だと思ったのに。おばさん、おかーさんとはとんど年、変わんないじゃん。良平さんも、よくがんばったねー」

少子化なんて騒ぐけど、ちょっとくらい高齢でも出産できるなら結構日本も安泰じゃん。

「大人をからかわないの。大体良平は『さん』付けで、私は『おばさん』って、どういう事よ？」

御子さんは不満顔で言う。そーいうこと言うと、余計茶化したくなるんだけど。

「だって、御子おばさん、おかーさんくらいの年でしょ？ 良平さんは好みのタイプだもん。沖さんも悪くなかったんだけど、おとーさんになっちゃったし」

「随分、年上好みなのねえ」御子さんがちょっとあきれ気味に言う。「だって、二人とも、大人の印象ひっくり返してくれたから。あんまり大人って信用できなかったんだよね。最後の最後は自分だけをかばうのが大人だっと思ってたから。まあ、ハルオさんも好みとは違うけど、いい人だよな」あの人がいなかったら、私、今頃この世にいなかったかもしれないもん！。

「ハルオだって、今じゃ彼女がいるわ。美羽もおじさん趣味を改善しないと、いつまでも彼氏ができないわよ」

むむっ？ やり返してきたな。なんの、そんな事気にしないもん。「へー。ハルオさん、彼女持ちになったんだ。でもご心配なく。私はもっと大人になってから、大人の恋愛するんだから。同級生なんてガキでガキで」

「あんたもそんなに大人になったようには見えないけど？」御子さ

んがくすりと笑った。

うつ。痛いところ、突いてきたな。確かに私の体型は、ちと、ガキっぽい。

「そんなのこれからだもん。これでも今じゃ、旬の女子高生なんだからね。背だつて伸びてるし、胸囲だつて増えてるし。見てよ、この制服姿。かわいーでしょー？ 結構いい学校、通つてんだから」私は立ち上がって、くるりと一回転して見せる。私の学校はこの辺でも人気が高くて、競争率が高かったのだ。だからこの制服姿はちよつと自慢なのだ。

すると、御子さんは意外と神妙な顔をして私を見つめると、

「そつ、良かったわ。ちゃんと卒業して、進学できたのね」と、言つた。

まいったな。そんな顔して、そんな事言われたら、からかえないじゃん。

「進学は諦めてただけだね。おとーさんが、色々助けてくれた。だから、おとーさんに恥、掻かせないような学校に行きたいって思つてね。内申に自信なかったけど、一か八かで受けたら受かったんだ」

「努力が報われたのよ。もともと美羽は頭、悪くなかったんだから。沖さんもいい娘を迎えられたわ」

「……ありがとう」私は素直に礼が言えた。御子さんが本当に喜んでいるのが分かったから。

「おい、美羽ちゃんが来てるんだって？」

良平さんが急に顔を出した。らしくない態度をしたばかりの私は焦つてしまう。

「あー、良平さん。今ね、良平さんが私のタイプだつて言ったら、御子さんがおじさん趣味だつて言つたんだよ。自分だつておんなじ趣味じゃんねー？」

さりげなく(?) 良平さんを持ちあげて、御子さんが良平さんを

おじさん扱いした事をアピールする。

「美羽！ あんた、そう言う言い方する？」御子さんがかさず反
応する。あはっ、元のノリに戻った。

「だって私、頭悪くないもーん。それにいい娘でしょ？」

「良くない！ その、子供らしからぬ生意気さを直さなきゃ、ちっ
とも可愛くない！」

ふーんだ、今、可愛くなくてもいいもーん。私だってあと三年も
すれば、ちゃんと大人っぽくなって、良平さんみたいないい男、ゲ
ットして見せるんだもんねー。御子さんには負けないんだから！

勇治の日常（前書き）

一番最初の「こてつ物語」に出てきた、勇治のその後です。

勇治の日常

「おい、勇治。これを見ろ」

俺は小さな自動車修理の工場を営む社長に、声をかけられた。社長と言っても、家族以外の社員は俺しかいないんだが。

「どうかしましたか？」なんとなく、言われる事に心当たりはあったのだが、とりあえずとぼけておく。

「どうかじゃない。なんだ？ この溶接の仕方は？ ここは面付けしておけと言ったはずだが？」

「点付けって、聞こえたんですが」しらを切ろうと無駄にあがいてみるが、

「嘘つけ。聞き違えたにしちゃ、細かく付けてるじゃないか。全面溶接するのが面倒で、お前、手を抜いたな？」

やっぱりバレてたか。俺はつい、舌打ちしてしまう。

「こら、なんて態度だ。いつも言っているだろう？ ウチみたいな小さな工場は、顧客の信用勝負だから、決して手を抜くんじゃないと」

「だってこれ、ホントの仕事じゃないじゃないですか。車のオイル漏れ修理に来た雑貨屋の、店の棚に使う棚受けをサービスで作ってやってるんだから」

俺だって、バイクや車の修理に手を抜くほど馬鹿じゃない。信用以前の問題だ。

「作ってやってるとはなんだ！ こういう小さなサービスで、ウチの姿勢を見てもらってるんだ。今は大手のディーラーだって、車検や修理には力を入れてる。ウチみたいところが得意に細かくサービスするのは当然だ。これだって立派な仕事なんだ。手を抜くな」随分畑違いな仕事だが。

「たかが棚受け金具に全面溶接なんて、大げさだなあ」点付けの溶接でも十分丈夫だと思うが。

「雑貨屋の棚はいろんな商品に乗せるから、安心して使えるように丈夫に作って、こっちの真心を伝えるんだ。こういう細かい事が客をウチにつなぎとめるんだ。ちょっとした事で気軽に声をかけてもらえる関係が、小さな工場じゃ大事なんだぞ。それをお前は……」

いつもの説教が始まりかけたところで、いつもの声がする。

「どーもー。郵便です。勇治君、また説教されてるのかい？」見慣れた郵便局員が笑顔を見せる。

「どうもー。ご苦勞様です」俺はこれ幸いと社長の説教から逃れ、郵便物を受け取る。

「毎日飽きずに小さな事でやりあってるなあ。二人とも、よっぽど相性がいいんだね」

「ま、まあ」照れ臭くてあいまいに答える。実は俺、この社長とは気があっている。社長もそこは分かっているらしくて、何でも引き受けるお人好しの社長も俺には文句や小言を遠慮なく言ってくるのだ。

「あ、礼似さんからだ」俺は社長に向けて手紙をかざしてみせた。

「おお、この間のバイクの修理の礼だろう。相変わらずマメな人だ」俺が社長に声をかけられ雇ってもらったのは礼似さんのおかげだ。社長は昔、礼似さんの「走り仲間」だった。若い時から走るよりいじる方が好きで、とうとう小さな工場を経営するようになったそうだ。

「礼似さんって、大胆でおおざっぱだけど、こういう所は細かいんですよね。ちょっとした事でもメールじゃなく、電話をくれるし、仕事の後は手書きの礼状を必ず送ってくれる」

俺が出会った礼似さんは、威勢が良くて、活発で、大胆不敵な人だった。でも、人の心を大事にする、優しい人でもあった。この細やかさも良く考えれば礼似さんらしい。

「ああ、やっぱりそうだ。修理後の洗車やワックスがけも丁寧で気

持ちが良かったと書いてくれている。満足してもらえたようだ。よかった。……おや？ 今日はお礼の品を同封します？ 他に何か入っているのか？」

言われて俺が封筒の中を探ると、確かに何か入っている。引っ張り出すと写真が出てきた。だが、

「社長、これ……」

その写真には礼似さんの、あられない姿が写っていた。ご丁寧にキスマークまでついている。

「組の者に処分されて、かろうじて残った一枚です。せつかくだからお送りしますので、是非、目の保養に利用してね？ じよ、冗談じゃないぞ。こんなもん、ウチの女房に見られちゃ大変だ。あいつも礼似さんを知ってるんだから。勇治、この写真はお前にやる。持って帰ってくれ！」

「いやです！ ウチにだつて年頃の妹と、やっと一緒に暮らし始めた母さんがいるんだ。二人とも礼似さんを知ってるんだから、こんなもの、持って帰れません！」俺は写真を社長に押し付ける。

「いや、お前の方が若いし、一人身だから色々役に立つだろう？ 遠慮をするな！」社長も押し返す。

「遠慮なんかしてません！ 大体これは社長宛の郵便です。俺が受け取る必要、ありません！」

「そんな事言わずに……」

二人でもめている所に、ひょいと手が伸びてきて、写真をパツとつかんでしまう。手の主を振りかえると、そこに社長の奥さんが立っていた。写真をしっかりと、眺めている。

「随分、いい写真を送ってもらっていること。あんだ、いつ、礼似さんとそんな仲になったのかしら？」

一瞬にして場の空気が凍りついた。さ、寒い。

「ちよつと、ゆっくり話を聞かせてもらえる？」奥さんはいっこりと笑う。だが、微妙にひきつっている。

「ご、誤解だ。お前も礼似さんの気性は知ってるだろう？　これは茶目っ気なんだ。信じてくれー！」

社長は奥の部屋に引っ張られていく。俺、自分があの人の子かと勘違いした時もあったが、そうじゃなくて本当に良かった。こんな無茶な母親じゃ、きっと人生大変だった。

あー、助かったあー。

御子の日常

この間のお義父さんへのお灸が効いたのか、良平とお義父さんとの無駄な張り合いは大分収まってくれた。やれやれ、世話が焼けるんだから。

あれから良平は真見に接する時は、真見の事だけ考える訓練をするんだと言って、ひたすら真見を視線で追いかけてまわしている。これじゃ真見もうつとおしいんじゃないかと思うけど、赤ん坊の順応力ってかなり高いらしくて、真見はあつという間に慣れてしまったみたい。むしろ、良平の方が必死で、横で見ていると「しもべ」って、こういう状態を言うんだなあと、感心させられてしまう。

お義父さんは、良平を意識するとどうしても真見に勘づかれる事が分かったらしくて、真見に直接訴えかけるのではなく、母親の私に真見の機嫌を計らせ始めた。

そして、事あるごとに私に媚びては「ジジジはママの味方でちゅからね。賢い真見ちゃんなら分かりまちゅよねー」と、真見の顔をうかがっている。

組のみんなもようやく赤ん坊の存在に慣れてきて、初めの頃のようちにちよっかいを出したがつたり、浮足立った様子は無くなってきたみたい。

それより今は私と良平が真見に時間を取られるから、その穴を埋めるべく忙しくしている。私も早く家事や組の事に関わりたいとは思っけれど、健診で会うベテランの親や保健婦さんに、

「赤ん坊でいるのはほんのちよつとの間だけ。二十年の子育ての一瞬间なんだから」

なんて言われると、この時間を他に割くのはもったいない気がする。てしまう。

私、かなり得してるよね。家族も、組のみんなも協力的で、真見

の気持ちまで察しがつくんだから。

良平やお義父さんが、真見にちよつと狂っちゃうくらいは大目に見なきゃね。ウチのツートップが二人揃って迫力無くなっちゃうのは問題かもしれないけど……。

そんなだらけ具合が見透かされるのか、どうしても目の届き方が悪くなるのか、シマの店の一つが、街の高校生の悪ガキに目をつけられてしまったらしい。

その店は少し引込んだ所にあるゲームセンターの向かいにあるので、ゲームに飽きた連中が軽い腹ごしらえに利用するようになった。

それはいいのだけど、ある日、店のバイトの女の子を強引にナンパしようとして、店主とトラブルになった。それをきっかけに悪ガキ達が店に連日の嫌がらせをして来たのだ。

相手が高校生なので、店主は商店会の会長に相談して防犯組織を作り、ウチの組でも見回りの回数を増やす事にした。これでおとなしくなるだろうと、警察や学校には相談しなかった。

ところがそれで甘く見られたようだ。悪ガキ達はおとなしくなるどころか、

「マッポも未成年相手じゃ、物を壊したり、大怪我でもさせない限り動けやしない。防犯パトロールなんてのは見かけ倒しにもならないし、学校なんていつでも辞めてやる。見回ってる真柴の連中ってのは、今、上の奴がアカンボ相手にグダグダになってるって聞く。どうせ本気で手なんか出せねえだろ？ こっちは未成年ってお墨付きがあるんだから」と、言って、店の前を通る通行人に因縁をつけたり、店先の看板や、近くの自販機を壊して逃げたりと、やりたい放題になってしまった。

「えらく舐めてくれたもんね。この真柴のシマを荒らすなんて、クソガキが。このままじゃ示がつかない。良平、ここはガツンと締めてやりましょう。私も久しぶりに身体を動かすわ」

深夜の授乳の寝不足もあって少タイラついていた私は、頭にきて真見を抱いたまま立ちあがった。

「何言ってる。お前は出て来るんじゃない！」良平は青くなって言ったが、私は止まらない。

「たかだか十代の世間知らずのガキ達に、こつも舐められてたまるもんですか！ 喧嘩は良平に任せるけど、一言説教してやらないと、腹の虫がおさまらないの」

そう言ってお義父さんが止めるのも聞かずに、私は店へと向かう。良平が慌てて後をついてきた。

いざ、店に着くと、ガキどもは一斉に真見を抱いた私を見て啞然とした。やった。機先を制したわ。

でもここで私は胸がいっぱいになってしまふ。目の前の子は言葉のない万引きの罪を疑われて、親にさえ信じてもらえず、学校にも悪いうわさが流れて絶望的な気持ちになっていた。

隣の子は亡くしたばかりの母親を、父親や、その親類に足げざまに言われたばかり。その後ろのリーダー格の子は両親から見放され、親戚の家をたらいまわしなされながら邪魔者扱いに耐えていた。

私は思わず彼らの境遇を口にして、「こんなにつらい思いをするのね」と、同情の言葉が出た。

彼らの感情や苦悩が、真見を通して生々しいまでに迫ってきたからだ。

すると彼らも感じるところがあつたらしく、涙を流して反省の弁を述べはじめた。

うつつ。みんないい子じゃないの。なんでこんなにいい子たちを、みんな邪険に扱うのかしら？

良平の出番は無かった。彼らは店主に詫びて、二度と悪さはしないと誓った。私は彼らの親や、身内に、彼らの事を分かってもらえるように、最大の努力をする事を約束した。

事が解決してみると、あの時の感覚は、ちょっと普通ではなかった気がして来た。

何だか真見と一緒にいると、強い感情に限って、こっちの感情を相手に体感させてしまう事が出来るようだ。あの時は私と真見の感情がその場にいた皆に感染し、良平まで涙を流しちゃってたし。

真柴には、今では新しい噂が流れている。私は「千里眼」から「子連れの聖母」と呼ばれ、良平は、「電光石火」あらため、「真柴の泣き男」と呼ばれるようになって、すっかりいじけているのである。

再び、いつかの日常（前書き）

最後は主役にシメてもらいます。

再び、いつつの日常

今日もボクは、とても平和に暮らしている。でも、お母さんが「お裁縫部屋」って言う所から出てこないの、ちよっとつまらない。昨日は車で遠くに連れて行ってくれたし、いっぱい遊んでくれた。公園の芝生でかけっこもしてくれた。「カフェ」とか言うところでいつもと違うご飯もくれた。ただ、「お友達」って言う、ボクにはうっとおしい奴等がまとわりつくうとしたのにはまいったけど。

お母さんは「どうしてこてつは他のお友達と遊べないのかしらねえ？」なんて言ってるけど、この「お友達」って奴等はボクとおんなじような姿で、お母さんみたいに二本足で歩かないし、優しい声もかけてこないし、何だかお母さん達とは違う匂いを振りまいている。しかも、こいつら無遠慮にも、ボクの匂いを嗅ごうとしてくるんだ。

「さあ、こてつ。ご挨拶をしましょうね」なんて、お母さんは言ってるけど、ボクの匂いを思いっきり嗅いでもいいのは、この世で一人、お母さんだけ。お母さんに似てる人なら少くはいいいけど、なんでボクがこんな良く分らない匂いを漂わせている連中に、匂いを嗅がせないといけないんだ？

ボクは簡単には匂いを嗅がせたりなんかはしない。その前に近寄られるのだって気に入らない。

それにこいつらは、絶対にお母さんを狙っている。そういう訴えるような目をしたり、お母さんの関心を引いたり、お母さんの手からおやつをもらったりするなんて、もつてのほかだ。

お母さんも、お母さんだ。いつもなら、

「こてつが一番かわいい。父さんよりも、他の誰よりも、こてつがこの世で一番かわいいわ」

なんて言っているくせに、ボクが「お友達」とやらを一生懸命に

お母さんに近づけないように気をつけてるのに、

「こてつはどうして、他のお友達と仲良く出来ないのかしら？」なんて言っている。

だ、か、ら！　ボクはこいつらをお母さんに近づけたくないの！　こいつらは父さんって人よりも、お母さんに媚びるのが上手そうだから、気を緩めないようにしてるんじゃないか！　どうしてお母さんはこうも鈍いんだ！　ボクがお母さんを取られるような真似、する訳ないじゃないか！

いつもの写真を撮るときだって、

「他のコと一緒に写れたらいいのにね」なんてため息をつく。そんな事絶対にしないぞ。ボクの笑顔はお母さんが喜ぶのが嬉しくって、つい、笑っちゃうだけなんだ。カメラとか言う訳の分からないものに笑ってるわけじゃない。お母さんに笑ってるのに、お母さんは何処まで分かっているんだか。

本当にお母さんの物凄い鈍さには、まいるんだよな。それでもボクは、お母さんが大好きだけど。

でも、今日はお母さんが、部屋にこもってずっと出てこないの、ボクはちよつと寂しい。だけど、実は昨日お母さんを守り疲れてしまっていたので、ボクにもいい、骨休みになっていたんだ。

「こてつー！　お待たせ。お洋服も、お着物も、沢山出来たわよ。さっそく着てみましょうね」

扉が開いて突然お母さんがそんな事を言ったと思ったら、ボクはお母さんに抱えられて、いきなり身体に何かをまとわされる。

「はい、お帽子かぶって。お袖を通しましょうねー。まあ。シャツ姿が似合うわ。どう？　タエさん？」

「ええ、可愛らしゅうございますね」

タエさんが、目を細めて頷いているが、ボクは寝ぼけてぼつつとしている。何よりうつとおしい。

昨日の「お友達」と言い、この、「お洋服」「お着物」と言い、

お母さんはどうしてこうも、うつとおしい事を喜んでボクにつきあわせるんだろう？

「こてつ、カメラ見て、笑って」お母さんがカメラを構えて言う。カメラに笑ってるんじゃないって言うのに。こんな気分で笑えと言われたって。

それでもお母さんの顔を見ると、つい、笑顔になりそうになる。ボクも弱いなあ。

「なんだ？ またこてつの服を作ったのか？」父さんという人が顔を出してきた。

「ええ、こっちは可愛いシャツ。これは袴姿ね。この写真で年賀状を作ろうと思って」お母さんが答える。

「ああ、それでこんなに早くに作ったのか。それでもだいぶ早いと思うが」

「あら、ベストショットを狙うのに、早すぎるなんてことは無いわ。それにしてもやっぱり柴犬って和犬なのね。こんなに和服が似合うなんて！」お母さんはご機嫌だ。ボクにはつらいけど。

「たしかに袴姿は凛々しいな。柴犬には良く似合う」珍しく父さんまで同意した。

「柄もシンプルだし。こてつは男の子なんだから、いつものゴテゴテした服より、この方がずっといい」

「あら、まだ、こんな序の口よ。もっと、可愛らしいのを作ったの。こっちがメインだから」

そう言ってお母さんがボクに別の何かを着せる。父さんと、タエさんの顔が、一気にひきつった。

「ほーら、総柄物の振り袖よ。ピンク色で可愛いでしょう？ 帯は大きな蝶々結びにしたの。可憐だわ」

えっと？ お母さん？ なんだかボク、すごく違和感を感じるんだけど？

「お、おい。こてつはモ口に男の子の顔だぞ。少し年期も入って来

てるし」父さんがドン引きな声で言う。

「でも、こてつは去勢手術を受けてるし。別に可愛ければいいでしょ？ 私の自信作なんだから」

お母さんは一人でニコニコしながら「やっぱり可愛いわ」を連発して言う。

でもね、お母さん。タエさんは啞然としているように見えるし、父さんは「そうじゃなく、男顔なんだ」と言って頭を抱えているし、写真を載せた、前に見えるパソコンの文字に、「女装」とか、「オカマ」とか、「顔とギャップ」って言葉がいっぱい載っているのが、ボク、すごく気になるんだけどなあ……。

おわり

再び、いつの日常（後書き）

最後までこんなネタですいません（笑）。楽しんで書かせていただきました。お付き合い頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4998w/>

こてつ物語の日常

2011年9月28日03時25分発行